*Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2008, Vol. 55, 105 − 125.*

# 肯定的自己評価の諸側面

## —自尊感情と自己愛に関する研究の概観から—

中 山 留 美 子[1)]

## はじめに

自尊感情と自己愛は自分に対する好意的・肯定的な見方や感覚（以下，肯定的自己評価）という点で共通しているにもかかわらず，異なる性質をもった概念として，対比的にすら捉えられている。

両概念は肯定的自己評価のどのような側面を捉えようとしているのだろうか。素朴に，あるいは概念的には，適度で現実に根ざした（真実の=genuine）肯定的自己評価が自尊感情であり，“高揚された（inflated）”自己評価とも言い換えられる，過度に肯定的な自己評価を自己愛と解釈することができる（たとえばCampbell, Rudich, & Sedikides, 2002; Papps & O' Carroll, 1998）。しかし，自尊感情と自己愛の間には常に正の相関が示されてきたものの，メタ分析の結果からは，その関連がそれほど強いものでないことも報告されており（$r$=29, $k$=11, $n$=2963, $p$<.001;Campbell et al, 2002より），ここからは，両概念が異質な側面を含んでいることも示唆される。

これまで，自尊感情と自己愛に関する知見は数多く提出されてきており，それぞれの概念に関して知見を整理する取り組みもいくつか行われている。また，両概念をともに扱い，効果の違いを検討した研究もある。しかし，それらの知見を比較検討し，両概念の共通点や相違点について，さらには両概念を超えた「肯定的自己評価」の性質や機能について，考察する試みは行われていない。

本論文は，自尊感情，自己愛という異なる2つの概念を「肯定的自己評価」という範疇に捉えながら，両概念に関する研究知見を概観・整理することにより，肯定的自己評価の内容や，肯定的自己評価がもたらす結果について改めて検討することを目的とする。まず，両概念について述べ，両概念に関する諸研究を概観する。次に，その測定に関して述べ，測定される内容の共通点と相違点について検討する。そのうえで，自尊感情，自己愛を捉えるいくつかの理論的枠組みについて紹介し，それらを整理したうえで両概念（肯定的自己評価）を包括的に捉える枠組みを提示する。最後に，今後の課題について述べる。

## 自尊感情と自己愛

### 自尊感情・自己愛の概念的定義

自尊感情（self-esteem）は，人々が自分に対して価値づける程度（Baumeister, Campbell, Krurger, & Vohs, 2003），自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚—感情—（遠藤，1992），などとして定義される。このような定義は，その表現において研究者による相違が多少見られるものの，感情的な側面を含んだ自己知識の評価的要素という理解において基本的には一貫しているといってよいだろう。

一方，自己愛（narcissism）は様々な文脈の中で多義的に用いられてきたが（Pulver, 1970），非常にポジティブな（あるいは高揚された）自己概念をもつという特徴（Campbell, Rudish, & Sedikides, 2002）や，リビドー（心的エネルギー）の自己への備給（Hartmann, 1964），「自分を愛すること」（小此木，1981; 小塩，1998aなど），Self-love（Bushman & Baumeister, 2002; Campbell et al., 2002など）という基本的な要素は，多くの実証的，理論的な研究者の共通理解に含まれるものと考えられる。

両概念の捉えられ方は，自己に対する肯定的見方や感覚（肯定的自己評価）という点において共通している。また，自己に関する具体的な評価というよりは，感情的な要素を多く含んでいるという点も，両者に共通する特徴であると考えられる（榎本，1998）。実際，両者は同義にも用いられてきた（Pulver, 1970など）。

### 自尊感情＝有益？ 自己愛＝有害？

近年の実証研究では，自尊感情と自己愛は区別して捉えられていることがほとんどである。両概念の理解として一般的なのは，自尊感情を有益なものとし，自己愛を有害なものとする見方である（たとえばCampbell et al.,

1）日本学術振興会・名古屋大学大学院教育発達科学研究科

2002)。

自尊感情を高く維持することは健康的で望ましいことであると広く考えられており，「自尊心と個人的および社会的責任を促進する作業委員会（the California Task Force to Promote Self-Esteem and Personal and Social Responsibility)」をはじめとした自尊感情促進への公的・社会的取り組みも世界各地で展開されてきた。一方，自己愛は人格障害の研究により生み出され，その後正常な人格（人格障害を持たない一般の人々）においても用いられるようになった概念であり（レビューとしてEmmons, 1987; 小塩，2004；Rhodewalt & Morf, 1995)，自己愛に関する研究の多くは，DSM（DSM-Ⅲ,APA, 1980; DSM-Ⅳ,APA, 1994）などに自己愛人格障害の特徴として記述されるような不適応的な側面が，正常な人格においてもみられるのではないかという予測の下でなされてきた。そのため，攻撃性や共感性の欠如などの望ましくない社会的行動を導く心的属性などを扱い，ネガティブな結果に焦点化する研究が多くなされてきた。

自尊感情と自己愛の違いは特に，対人関係上の特徴の差異として議論されてきた（Campbell et al., 2002; 小塩，1998a)。まず，自尊感情の高い人（高自尊心者）は対人不安が低く，良好な対人関係を保っていると考えられている。このような考えは，ソシオミーター理論（Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995）によって説明される。対照的に，高自己愛者の対人関係はネガティブなものと考えられがちである。これまで，自己愛人格障害に顕著な特徴として記述されてきた共感性の低さや親密性の低さ，攻撃性などが，自己愛と関連する変数として検討されてきた。

果たしてこのような見方は妥当なのだろうか。両者を弁別する立場から，近年では，NPI の分析の際に自尊心尺度を統制変数として用いる手法も勧められている（Bushman & Baumeister, 1998; 川崎・小玉，2007；Paulhus, 2001; Rhodewalt & Morf, 1995, 1998; Wallace & Baumeister, 2002)。しかし，自尊感情や自己愛に関する数多くの研究から示されてきた知見は少なからず混乱しており，そこからは，両概念が必ずしも明確に分けられないことも示唆される。

**自尊感情と自己愛の導く肯定的・否定的な結果**

Baumeisterら（Baumeister et al., 2003）は，自尊感情が導く結果について，パフォーマンス，対人関係，攻撃性・暴力・非行・反社会的行動（以下，社会的行動），幸福感・対処・抑うつ（以下，精神的健康）という4つの領域ごとに研究知見を広く概観し，整理している。自己愛とパフォーマンスとの関連はこれまでほとんど示されていないため，ここでは，Baumeisterらのレビューをもとに，特に対人関係，社会的行動，精神的健康の3領域に関して自尊感情，自己愛との関連が報告されてきた肯定的・否定的結果を概観し，比較する。

**自尊感情，自己愛と対人関係の関連**　自尊感情の高さは自己報告による対人魅力の高さや人気・仲間の多さ，質の良い対人関係と正の関連をもち，自尊感情が良い対人関係を促進する要因となっているが（Battistich, Solomon, & Delucchi, 1993; Glendinning & Inglis, 1999; Keefe & Berndt, 1996; Lakey, Tardiff, & Drew, 1994など），しかし，客観指標を用いた研究はほとんどそれらの知見を支持しておらず，自尊感情と対人関係がほとんど無関連であることが示唆されている（Adams, Ryan, Ketsetzis, & Keating, 2000; Bishop & Inderbitzen, 1995; Buhrmester, Furman, Wittenberg, & Reis, 1988; Campbell & Fehr, 1990; 詳細な議論はBaumeister et al, 2003を参照)。

自己愛も，高い身体的魅力を報告すること（Gabriel, Critelli, & Ee, 1994）と関連することが示されている。また，親友・友人集団の獲得や他者から好意的な評定を受けることに関連することを示す研究もあり（小塩，1999)，これらからは，自己愛が対人関係を円滑にする機能をもつ可能性が示唆される。一方で，対人関係に対して否定的な影響をもたらしそうな共感性の低さ（Watson, Grisham, Trotter, & Biderman, 1994）や親密性の低さ（Carroll, 1987）なども，自己愛と関連することが報告されているが，これらについては，自己愛と共感性とが関連しないとする研究知見もあり（Biscardi & Schill, 1985; 佐方，1987)，知見が一貫していない。

また，特に恋愛関係に関して，自尊感情の低さが1ヶ月間での別離しやすさ（Hendrick, Hendrick, & Adler, 1988)，破壊的な行動のとりやすさ（Murray, Rose, Bellavia, Holms, & Kusche, 2002）と関連すること，自己愛の低さが恋愛に対する消極的態度や回避的態度（小塩，2004；研究9）や，恋愛相手が自分に熱中してないという認知（小塩，2004；研究10)，過去の失恋経験から得る自信の低さ（小塩，2004；研究11）と関連すること，自己愛の高さが異性に対する評価懸念の強さと関連することが示されている。

Paulhus（1998）は，自尊感情，自己愛と対人関係の関連について縦断的に検討を行い，両変数の効果の比較を行っている。そこでは，自己愛者ははじめ，仲間から面白くて温かく，同意性（協調性）が高いと評定されているが，7週間後には，温かみがなく尊大で敵意的で同意性が低いと評定されることを示唆する結果が示されている。ここからは自己愛者が時間経過とともに肯定的に評価されなくなることが示唆されるが，高校生を対象にゲス・フー・テストによる調査を行った研究（小塩，

1999）では，学年末に近い1月の時点で，「好かれていると思う人」「友達が多そうな人」という問いに対する高自己愛者の指名数が多く，これはPaulhus（1998）の知見を支持しない結果であるといえよう。一方，高自尊心者は，相互作用の初期においても，7週間が経過した後においても，同意性が高いという肯定的な印象を維持することが示されたものの，係数が低く，他の多くの変数（外向性や神経症傾向）でもごく小さい値にとどまっており，自尊感情は他者印象にあまり関係しないことが予想される。

このような結果からは，対人関係側面における自尊感情と自己愛は，自己愛についてややネガティブな知見が提出されているものの，大きな相違がないことや，そもそも対人関係を予測する要因となるのかという点について両者ともに知見が混乱しており，明確な結論が出せないことが見て取れる。

**自尊感情，自己愛と社会的行動の関連**　自己報告を扱った先行研究からは，自尊感情は攻撃性や反社会的行動に関わる変数に関して，直接的で強力な予測因とはならないことが示唆される（Baumeister et al., 2003も参照）。例えば，Baumeisterら（Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Bushman & Baumeister, 1998）は，自尊感情と攻撃性に関連がないことを指摘している。自尊感情と自己報告による非行行動の負の関連が認める研究（Neumark-Sztainer, Story, French, & Resnick, 1997）もあるが，その関連は極めて弱いものであり，また，より多くの人を対象に縦断的に行われた複数の研究では，ほとんど関連がないことが示されている（Jang & Thornberry, 1998; Rosenberg, Schooler, & Schoenbach, 1989）。しかし実験研究からは，高い自尊感情を持つ人が，自我脅威的な実験状況（難易度が高いゲーム；Exp.1,2）や自我脅威を受けた後（Exp.3）において自己管理能力を失いリスキーな行動をとりやすくなること（たとえば高額を賭ける）と関連することも示されている（Baumeister, Heatherton, & Tice, 1993）。

一方，自己愛は自己報告による怒りや敵意の強さと正の関連をもつことが示唆される。McCann & Biaggio（1989）は，高自己愛者が，より怒りの喚起を表出することを示している。同様にWashburn, McMahon, King, & Reinecke（2004）は，NPI合計点と自己報告による攻撃性が関連することを報告している（ただし友人，教師報告の攻撃性は予測しない）。Hart & Joubert（1996）は，高自己愛者の敵意が高いことを，福田・大石・篠置（1987）は，PFスタディとの関連から，高自己愛者は，欲求不満の原因を他者や環境に帰属する傾向があることを示している。Rhodewalt & Morf（1998）は，自己愛者が脅威（失敗のフィードバック）に対して怒りを示す傾向があることを明らかにしている。

また，自尊感情と自己愛をともに扱った研究からは，社会的行動に対して自尊感情と自己愛が異なった効果をもつことが示されている。たとえば，Barry, Grafeman, Adler, & Pickard（2007）は，非行の自己報告を従属変数とした重回帰分析に自尊感情と自己愛と自己愛とを同時投入したところ，自己愛の主効果のみが有意（$\beta$ =.30, $p$<.001）であることを明らかにしている。自尊感情が高く自己愛が低い場合よりも自尊感情と自己愛がともに高い場合に特性的な怒りが高いこと，自尊感情と自己愛が低い場合に比べて，自己愛高い場合に特性的な怒り反応が高く報告されることなどが明らかになっている（Papps & O' Carroll, 1998）。この結果からは，自尊感情が自己愛との相互作用によって怒りと結びついており，単独の効果を持たないことが示唆される。また，攻撃的な児童・生徒と攻撃でない児童・生徒を比較した研究では，攻撃性が高いほど自己愛が高いことが示されたが，自尊感情には有意な差がなかった（Ang & Yusof, 2005）。

実験研究からも，自尊感情でなく自己愛が社会的行動に影響力をもつことが示唆される。Morf & Rhodewalt（1993）では，自尊感情を統制したときに攻撃性（他者に対する否定的評価）への自己愛の効果が有意となることが，Martinez, Zeichner, Reidy, & Miller（2008）では，自己概念に打撃を与えうる不確実状況において，自尊感情を共分散として投入したうえでも，自己愛が攻撃性（無実の他者に対する攻撃）と関連することが明らかにされている。Bushman & Baumeister（1998）は，自我脅威（他者からのネガティブな評価）を受けた場合に，自己愛は不快なノイズを聞かせるという攻撃的行動を強める傾向に関連したが，自尊感情の効果はみられないことを示している。Smalley & Stake（1996）では，自己愛はネガティブな評価を下した他者に対する否定的コメントや敵意に関連するが，自尊感情はそれらに関連せず，評価基準（テスト）に対する否定的コメントのみを予測することを明らかにしている。

しかし，先に挙げたHeatherton & Vohs（2000; Study 2）では，自我脅威状況（将来の所得能力を予測するというテストがほとんどできないという事態）を経験したあと，高自尊心者が低自尊心者よりも，（テスト結果を知らない）パートナーに対する評価の好ましさが下がり，そのパートナーに敵意を感じることを示している。また，ここでは，自尊感情と自己愛をともに投入した結果，自尊感情の効果のみがみられ，自己愛は効果を持たないことも示されている。

**自尊感情，自己愛と精神的健康の関連**　自尊感情と幸

福感（生活満足度）には強い正の関連がみられることが一貫して報告されてきている（Diener & Diener, 1995; Furham & Cheng, 2000; Shackelford, 2001; Sedikides, Rudich, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004）。また，自尊感情は抑うつや不安，孤独感の低さなどに対して負の効果を示すことが示されており（Sedikides et al., 2004），その効果は，縦断的方法による調査によっても確認されている（Trzesniewski, Donnellan, Moffit, Robins, Poulton, & Caspi, 2006）。

同様に自己愛も，幸福感の高さや抑うつの低さとの関連をもつことが示されている。Rose（2002）は，自己愛が主観的well-beingの高さと正の関連をもつことを示している。Watson & Biderman（1993）は，自己愛が抑うつや不安の低さと関連することを示している。また，Sedikides et al.（2004）は，抑うつや孤独感，主観的well-beingなどを扱って5つの研究を行い，自己愛が一貫して心理学的な健康と正の関連をもつことを示している。

**結果の共通点と相違点**　自尊感情，自己愛と各領域における変数との関連について先行研究が示してきた知見を比較したところ，まず，対人関係領域に関して知見は類似していた。諸変数との関連について，両概念には大きな相違がないか，相違を議論できるほどの一貫した研究知見が得られておらず，自尊感情が対人的に必ずしもポジティブな効果をもたらさないこと，自己愛が必ずしもネガティブな効果をもたらさないことが示唆される。

精神的健康に関して，自尊感情と自己愛は各指標と同方向での関連を示していた。ただし，示されてきた相関係数や標準偏回帰係数からは，自尊感情が精神的健康と中程度の関連を持つのに対し，自己愛はあまり強い関連を持たないことも見て取れた。また，社会的行動の領域，すなわち攻撃性や怒りなどの特徴については，自尊感情よりも自己愛が効果をもつことが示唆された。

## 自尊感情と自己愛の扱う“肯定的自己評価”

実証知見からは，ともに肯定的な自己概念を扱う両概念が，ある側面では共通し，他方では異なっていることが明らかとなった。しかし，自己愛ではなく自尊感情が攻撃性に関連するという知見（Heatherton & Vohs，2000）があるなど，自尊感情と自己愛の導く結果は各概念の扱われ方から見て取れるほどには異なっていない。また，先行研究からは，自尊感情が精神的健康の指標以外の多くの変数を予測しないことが見てとれるばかりか，ネガティブな変数との関連をもつことも示されている。示されてきた結果が概念的な予測とは大きく異なっていることの背景には，自尊感情で捉えられる肯定的自己評価の曖昧さがあると考えられる。ここでは，最も多用される尺度項目をもとに，両概念が異なる結果を導くことや，自尊感情が混乱した結果を導くことの原因について考察する。

### 自尊感情，自己愛の操作的定義

自尊感情を測定する尺度として最も多用されているのは，Rosenberg（1965）の自尊感情尺度（Rosenberg Self-Esteem Scale; RSES）であり（Gray-Little, Williams, & Hancock, 1997），国内では山本・松井・山成（1982）による邦訳版がよく用いられている（自尊感情測定の歴史については遠藤・井上・蘭，1992を参照）。自己愛傾向の測定尺度としては，Narcissistic Personality Inventory（NPI; Raskin & Hall, 1979）が，国内においてはその短縮版であるNPI-S（小塩，1998b）が最も一般的に使用されている（測定の歴史については小塩，2004を参照）。Table1,2に，それぞれ国内において最も多用される尺度内容を示す。

Table 1　自尊感情尺度（Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成，1982による邦訳版）[注]

| | |
|---|---|
| 1 | 少なくとも人並みには，価値のある人間である。 |
| 2 | いろいろな良い素質を持っている。 |
| 3 | 敗北者だと思うことがよくある。 |
| 4 | 物事を人並みには，うまくやれる。 |
| 5 | 自分には，自慢できるところがあまりない。（＊） |
| 6 | 自分に対して肯定的である。 |
| 7 | だいたいにおいて，自分に満足している。 |
| 8 | もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。（＊） |
| 9 | 自分は全くだめな人間だと思うことがある。（＊） |
| 10 | 何かにつけて，自分は役に立たない人間だと思う。（＊） |

注：訳出された尺度内容は山本（1991）より引用
（＊）は逆転項目

自尊感情尺度と自己愛人格目録短縮版の内容を比較してみると，大きく2つの点において両者が異なっていることが見て取れる。1つ目は，ともに肯定的自己評価を扱っているものの，その度合いが異なるということ，もう1つは，自尊感情尺度に1次元性が指摘される一方で，自己愛尺度は複数の次元から成ることが一貫して指摘されてきているということである。

**自己愛＝過大に高揚された自己評価？**　まず，1つ目の点に関して，これまで指摘されてきたように，自尊感情尺度に比べ，自己愛尺度がより高く（高揚され），他者に対する優越の意識に根差した自己評価を扱っていることがわかる。例えば，自尊感情尺度には，「自分に対して肯定的である」（項目6），という肯定的自己評価をそのまま反映した項目とともに，「人並みには・・・」（項

Table 2　自己愛人格目録（Raskin & Hall, 1979; 小塩，1998による邦訳短縮版）

| | |
|---|---|
| 優越感・有能感 | |
| 1 | 私は，才能に恵まれた人間であると思う |
| 4 | 私は，周りの人たちより，優れた才能を持っていると思う |
| 7 | 私は，周りの人たちより有能な人間であると思う |
| 10 | 私は，周りの人たちが学ぶだけの値打ちのある長所を持っている |
| 13 | 周りの人々は，私の才能を認めてくれる |
| 16 | 私は，周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている |
| 19 | 私が言えば，どんなことでもみんな信用してくれる |
| 22 | 私に接する人はみんな，私という人間を気に入ってくれるようだ |
| 25 | 私は，どんなことでも上手くこなせる人間だと思う |
| 28 | 周りの人たちが自分のことをよい人間だと言ってくれるので，自分でもそうなんだと思う |
| 注目・賞賛欲求 | |
| 2 | 私には，みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある |
| 5 | 私は，みんなからほめられたいと思っている |
| 8 | 私は，どちらかといえば注目される人間になりたい |
| 11 | 周りの人が私のことをよく思ってくれないと，落ち着かない |
| 14 | 私は，多くの人から尊敬される人間になりたい |
| 17 | 私は，人々を従わせられるような偉い人間になりたい |
| 20 | 機会があれば，私は人目に付くことを進んでやってみたい |
| 23 | 私は，みんなの人気者になりたいと思っている |
| 26 | 私は，人々の話題になるような人間になりたい |
| 29 | 人が私に注意を向けてくれないと，落ち着かない気分になる |
| 自己主張性 | |
| 3 | 私は，自分の意見をはっきり言う人間だと思う |
| 6 | 私は，控えめな人間とは正反対の人間だと思う |
| 9 | 私はどんなときでも，周りを気にせず自分の好きなように振る舞う |
| 12 | 私は，自分で責任を持って決断するのが好きだ |
| 15 | 私は，どんなことにも挑戦していくほうだと思う |
| 18 | これまで私は自分の思う通りに生きてきたし，今後もそうしたいと思う |
| 21 | いつも私は話しているうちに，話の中心になってしまう |
| 24 | 私は，自己主張が強いほうだと思う |
| 27 | 私は，自分独自のやり方を通すほうだ |
| 30 | 私は，個性の強い人間だと思う |

下位尺度別で項目番号順に並べてある

目1, 4）という，「他者と同程度に良い」レベルや，「だいたいにおいて・・・」（項目7）という表現からは，「常に良いわけではないが（概して）良い」というレベルでの肯定的自己評価が含まれている。これらのことからは，自尊感情尺度が，他者と同程度で，適度なレベルでの「良さ」を測定しようとしているものと捉えられる。また，このような自己評価は，客観的現実に基づく正確な評価であるとも考えられている（Ang & Yusof, 2005）。それに対し，自己愛は「才能に恵まれた人間である」（項目1），「どんなことでも上手くこなせる」（項目25）などという非常に，あるいは過度に肯定的な自己評価や，「周りの人たちより」（項目4, 7）という，他者よりも良いという感覚を含む肯定的自己評価を反映していることが見て取れる。

**自己愛に含まれる2成分**　また，2つ目の点に関して，自尊感情，自己愛の両尺度に因子分析を行った研究からは，それぞれの尺度に含まれる次元数が異なることが指摘されている。まず，2次元性の可能性に関する長い議論を経てはいるものの，自尊感情尺度については1因子構造での共通理解が得られている（梅垣，2006）。一方，自己愛尺度には一貫して，複数の因子が見出されている。例えば海外では4因子構造（Emmons, 1984, 1987）や7因子構造（Raskin & Terry, 1988）が報告されており，国内で多用されるNPI-Sにおいては一貫して3因子構造が確認されている。ここからは，自己愛が，自尊感情には含まれない異成分を含んでおり，その成分が両者の違いを生み出していることが予想される。

自己愛の下位側面は諸変数との関連がそれぞれ異なっており，同じ変数に対して正反対の関連を示すこともある。たとえば，Witte, Callahan, & Perez-Lopez (2002) は，NPIの因子のうち，「権力（Authority）」「権利の主張（Entitlement）」が怒りを感じる傾向に対して正の影響，「自己顕示（Exhibitinism））」「自己満足（Self-Sufficiency）」が負の影響を与えることを示している。Hickman, Watson, & Morris (1996) は，「リーダーシップ／権威（Leadership/Authority）」「優越性／尊大さ（Superiority/Arrogance）」「自己没頭／自己賞賛（Self-Absorption/Self-Admiration）」が楽観主義と正の関連をもつ一方で，「搾取性／権利主張（Exploitativeness/ Entitlement）」が負の関連を示すことを明らかにしている。下位側面のうち，特に「権利の主張」は，他の下位尺度と異なり一貫してネガティブな特徴との関連が示されてきており，異質な側面であることが推測される（Emmons, 1984）。また，NPI-Sでは，「優越感・有能感」および「自己主張性」は友人関係尺度との間に正の関連をもつが，「注目・賞賛欲求」は負の関連をもつことが示されている（小塩，1998a）。

これに関し，理論的文脈では，自己愛が2つの下位側面に分類できることが指摘されており（Gabbard, 1989, 1994; Masterson, 1993; ロニングスタム，2003），このような指摘からは，これまでに挙げた先行研究において自己愛，すなわちNPI総得点が扱ってきた（過度に）肯定的な自己評価は，均質なものではなく，2つの下位側面の組み合わせにより規定されるものであったことが示唆される。そしてこのような考えはMMPIなどによる自己愛尺度を分析した複数の実証研究によっても支持されている（Hibbard, 1992; 小塩，2002a; Rothvon & Holmstrom, 1996; Wink, 1991）。

自己愛に含まれる2側面は自己価値の高さや自己の過大評価を共通点としているものの，一方はそのような自己評価を積極的に主張する傾向（誇大性）と関連し，もう一方は自己評価に見合った態度や扱いを他者に求めたり，外的な評価に過剰に反応する傾向（過敏性）と関連していることが予想される（示唆的な研究として小塩，1998a；Wink,1991，中山・中谷2006も参照）。例えばWink（1991）では，「誇大性 - 顕示性（Grandiosity-Exhibitionism）」「傷つきやすさ - 敏感さ（Vulnerability-Sensitivity）」という2つの因子が得られているが，ともに過大評価や自己耽溺に関連するものの，1つ目の因子は自己確証や主張性，2つ目の因子は内向性や不安，防衛などと関連することが示されている。NPIのなかで異質なことが指摘される「権利の主張」は，より明確に対人的で，他者がどのように自分を扱うかという個々人の仮定を強調する因子であり，他者から特別で優先的な扱いを期待する傾向を反映することが指摘されている（Exline, Baumeister, Bushman, Campbell, & Finkel, 2004）。また，小塩（2002a）はNPI-Sの下位尺度のうち「優越感・有能感」および「自己主張性」に対して高い重み，「注目・賞賛欲求」に対して中程度の重みを示す「自己愛総合」と，「注目・賞賛欲求」に高い重み，自己主張性に対して中程度に高い負の重みを示す「注目 - 主張」という2成分を得ている。このような内容，すなわち自己愛を，顕在的な誇大性と（潜在的には）ネガティブな自己への態度の2側面からとらえようとする見方は，Kernberg（1970），Kohut（1971）などに見られる古典的な自己愛論にも対応するものである（Zeigler-Hill, 2006）。

理論的に指摘される2つの側面について実証的に測定しようと尺度を作成する試みも見られる。たとえばHendin & Cheek（1997）は，過敏的自己愛尺度（HSNS）を作成しており，国内では高橋（1998）や中山・中谷（2006）が，Gabbard（1994）の指摘に基づき，2種類の自己愛を測定する尺度を作成している。また，清水・川邊・海塚（2006，2008）は，対人恐怖傾向から2つの側面を捉える尺度を作成している。

先行研究からは，自己愛の2側面が無相関であることが一貫して示されている（Hendin & Cheek, 1997; 中山・中谷，2006；Wink, 1991など）。これは，尺度（NPI）の総得点が同じであっても，その背景にある肯定的自己評価の性質が異なっており，2種類の下位側面の組み合わせによる様々なバリエーションがみられる可能性があることを示している。

**尺度内容から見て取れる両概念の相違**　以上のことからは，自尊感情と自己愛から導かれる結果の違いは，肯定的自己評価のレベルまたは性質の違いによるものであることが示唆される。

肯定的自己評価のレベルについて，Baumeister et al.（1996）は，過度な肯定的自己評価（自己愛）が攻撃性を予測するプロセスに関するモデルを提案している（自己本位性脅威モデル，モデルの概要については中山，2008；岡田・中山，2008も参照）。先行研究からは自尊感情よりも自己愛が攻撃性などの（反）社会的行動に影響しそうであることが見て取れたが，このモデルからは，高揚された自己評価を維持しようとすることで，失敗などのネガティブな情報に対して自我脅威を感じやすくなり，攻撃を含め，自己評価を回復するための認知的・行動的な様々な自己調整過程が引き起こされることが推測される（レビューとして中山，2008）。一方，常に良いわけではないがだいたいにおいて肯定的であるという現実に根ざした自己評価（自尊感情）をもつ人は，ネガティブ情報を自我脅威に結びつけにくく，ネガティブな情報に対しても極端な態度をとりにくいと考えられる。

性質の違いに関しては，自己愛にのみ含まれる特徴，すなわち自己評価に見合った態度や扱いを他者に求め，他者が自分に対してもつ印象や評価に過度に依存する傾向が，他者に対する否定的行動を導くことが予想される。他者の扱いは常に思い通りに得られるものではなく，したがってこのような傾向をもつ自己愛的な人は，気分を害しやすいと考えられる（Exline et al., 2004）。他者からの否定的評価は，否定的な結果を得たというよりも面子をつぶされたと受け取られ，生じたネガティブな気分は評価自体よりも評価者に対して向けられるため，攻撃的な反応が導かれやすくなるのであろう。

**自尊感情が扱う肯定的自己評価の曖昧さ**

自尊感情が概念的な定義から議論されるような社会的，適応的にポジティブな現象をほとんど予測しないということは，かねてから指摘されてきた（Baumeister et al., 2003; Farnham, Greenwald, & Banaji, 1999など）。このことに関し，自己に対して高い評価を持つ高自尊心者には自己愛的傾向をもつ者が含まれる潜在的な可能性が存在するという指摘がされており（森尾・山口，2007），実際，自尊感情尺度と自己愛尺度がともに優越性を測定する尺度と正の関連をもつことが指摘されており，現実的に報告される高い自尊感情は，自己愛が扱う，高く優越性に根ざした自己評価をも含んでいることが示唆されている（Brown & Zeigler-Hill, 2004; Figure 1）。また，Rosenberg（1965）の尺度を含む伝統的な自尊感情尺度では，定義に示されるような精神内に存在する“自尊感情”よりも，他者に対して示したい自己（自己呈示的な志向性）を測定しているということも指摘されている（Baumeister, Tice, & Hutton, 1989; Salmivalli, 2001）。高い自尊感情をもつ人が，恥をかく状況では努力するが，面子が保たれる場合にはパフォーマンスを下げること（Baumeister & Tice, 1985）や，自己に関する非現実的に肯定的な主張をすること（Roth, Snyder, & Pace, 1986）など，自尊感情が，これまで自己愛との関連から議論されてきた，優越や自己高揚を目指す意識や過程に関連することは，実証的にも示されてきた。

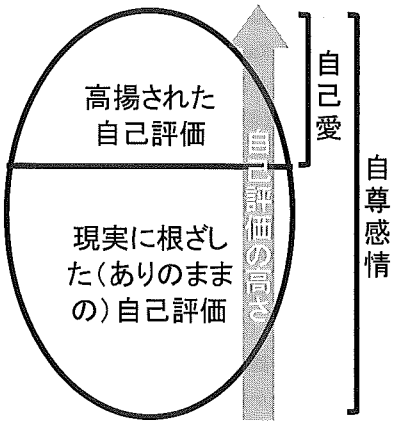


Figure 1　自尊感情と自己愛が扱う肯定的自己評価の範囲

**自尊感情を分類する変数**

自尊感情に関する知見が概念的理解と不一致であったり混乱していたりすることの一因は，自尊感情尺度が肯定的な自己評価を広く捉えており，概念的に指摘される自尊感情の範囲のみならず，自己愛と関連する肯定的自己評価の範囲を含んでいるためであることが予想される[1]。また，近年では，自尊感情尺度で一次元的に測定される自尊感情が，様々な形態の自尊感情を含ん

1　これに関し，Rosenberg (1965) は自尊感情に「Very good（とてもよい）」と「Good enough（これでよい）」という2つの内包的意味が含まれることを指摘している（小塩，1997での議論も参照）。

でしまっている（heterogeneous）とも指摘されている（Jordan, Spencer, & Zanna, 2005; Kernis, 2003）。

Kernis（2003）によれば，自尊感情を分ける重要な変数の1つとして，脆弱性（fragile）と確実性（secure）の度合いがある。脆弱な自尊感情をもつ人は，ポジティブだが影響を受けやすい自己評価を怒りや敵意をもって防衛しようとする傾向が高いが，不安のない確実な自尊感情をもつ人は，ありのままの自分を愛しており，そのしっかりとした自己価値感が健康的でポジティブな結果を導くと考えられる（Kernis, Lakey & Heppner, 2008）。

近年，このような観点から自尊感情を分類するための新たな変数がいくつか提案されている。代表的な変数には，自尊感情の不安定性（Stability of self-esteem/ Labile self-esteem），潜在的自尊感情（Implicit self-esteem），随伴性自尊感情（Contingent self-esteem/ Contingency of self-worth）がある。

**自尊感情の安定性**　自尊感情の変動を考慮することの必要性は，自尊感情のレベルを測定するものとして現在最も多用される尺度が提案されたRosenberg（1965）においてすでに指摘されていた。Kernis（2005）は，即時的または文脈依存的な自己価値感の短期的変動を経験する性格傾向を，自尊感情の安定性として概念化している。また，この傾向は，自己に対する強い関心や自我関与領域における評価的出来事に対する過剰な敏感さ，社会的な評価源に対する過度な依存などと関連するとされる（Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993; Kernis, Paradise, Whitaker, Wheatman, & Goldman, 2000）。

また，Kernisら（Kernis, Grannemann, & Barclay, 1992; Kernis et at., 2008）によると，自尊感情が高い人において，自尊感情の不安定性（安定性の低さ）はより安定的で安全な肯定的自己評価を獲得し維持しようという関心の強さと関連し，自尊感情が低い人においては，自尊感情の不安定性は持続的な否定的自己評価を回避しようという関心の強さと関連するという。同様に，Deci & Ryan（1985）も，高く不安定な自尊感情をもつ人が自己価値の決定因として他者のフィードバックに依存し続ける傾向があることを指摘している。これらのことからは，自尊感情の高さが概念的に肯定的自己評価のレベルと関連するのに対し，自尊感情の安定性は肯定的自己評価を獲得・維持・防衛しようとする動機に関連することが推測される。

操作的には，自尊感情の高さが，単一時点により測定された尺度得点（Rosenberg,1965による自尊感情尺度など）により定義されるのに対して，自尊感情の安定性は，複数時点（4日ないし5日間にかけて1日1回か2回ずつ）により測定された尺度得点（Rosenberg, 1965による自尊感情尺度）の標準偏差として定義される。自己価値感の短期的変動は，理論的にも実証的にも，自尊感情の高さとは区別されることが指摘されるが，両概念は中程度の負の相関関係にあることも報告されている（$r$=-.46, $p$<.01; Kernis et al., 2008，ただし他の研究ではKernis et al., 1989で$r$=-.10, *ns*，Kernis et al., 1993では$r$=-.17, *ns*などほとんど無関連）。

**潜在的自尊感情**　自尊感情が顕在的・意識的に表出・測定される自己価値の感覚を扱う概念であるのに対し，潜在的自尊感情は，自動的で非意識的な“自己に関する情緒的連想性（affective association about the self）”を扱っている（Kernis et al.,2008）。Greenwald, McGhee, & Schwartz（1998）は真の態度である潜在的自尊感情に自己呈示動機が加わったものが顕在的自尊感情であるとの考えを示し，また，Epstein & Morling（1995）は，潜在的自尊感情と顕在的自尊感情の不一致が，ネガティブな自己関連情報に対する脅威の感じやすさや，防衛的な過程への従事しやすさを導くとの見方を提示している。

潜在的態度とは，社会的対象に対する感情・思考・好意を媒介する，内省的に特定できない（あるいは正確に特定できない）過去の経験の痕跡であるとされる（Greenwald & Banaji,1995）。したがって，潜在的自尊感情も過去経験により形成されたものであることが予想されるが，実際のところ，潜在的態度がどのような過程により影響され，形成されるのかは明らかとなっていない。

潜在的自尊感情は，ネームレター効果（Name Letter Test: NLT, Nuttin, 1987）やIAT（Implicit Association Test; Greenwald & Farnham, 2002）などによって測定される。ネームレター効果では，アルファベット26文字に対する好意度を尋ねていき，自分の名前に含まれるアルファベットを他より好ましく評定しているほど，潜在的自尊感情が高いと評定される。また，IATでは，予め特定された自己関連語と非関連語への反応時間の差異により潜在的自尊感情を測定する。（顕在的）自尊感情と潜在的自尊感情は独立した次元として機能し，両者にはほとんど関連がないことが指摘されている（Greenwald, & Farnham, 2000, Exp.1で$r$=.13,11, *ns*; Jordan et al., 2008, Study2で$r$=-.07, *ns*; Kernis et al., 2008では$r$=.24, $p$<.01など）。

**随伴性自尊感情**　随伴性自尊感情は，優越や他者あるいは内的な期待に応えることなどの結果として（それらに依存して）自分自身に対する感情を抱く傾向を意味する（Kernis & Goldman, 2006）。随伴した自尊感情をもつ人は，特定の評価領域に関するとらわれを持っており，他者にどのように思われているのかを気にしているため，自己価値感を確かなものにするために，常

に評価基準に合った行動を取ろうと努力する（Kernis & Goldman, 2006）。

このような傾向は，自己価値の随伴性尺度（Paradise & Kernis, 1999　項目内容はKernis & Goldman, 2006を参照; 邦訳版として伊藤・小玉，2006）により捉えられている。また，Crockerらは，より状況特定的に随伴した自尊感情を捉えようとし，全体的な傾向としての随伴性を捉えようとする独自の概念化を行っており（Contingency of self-worth; Crocker & Park, 2003, 2004; Crocker & Wolfe,2001），Kernisらとは別の自己価値の随伴性尺度を作成している（Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette, 2003; 邦訳版として内田，2008）。自尊感情と随伴性自尊心の関連は，全体として（外的評価，魅力，内的基準などに対する自尊感情の付随の合計点から）測定する尺度で弱い負の相関から中程度の負の相関（$r$=-.51, $p$<.01, Kernis et al., 2008; $r$=-.25, $p$<.01，伊藤・小玉, 2006），領域ごとに測定する尺度では無相関（“倫理”および“家族・友人サポート”で$r$=.00, $ns$）から中程度の負の相関（“他者評価”で$r$=-.52, $p$<.001）とばらつきがあることが報告されている（内田，2008；Crocker & Luhtanen, 2003では.00<|$r$|<.24）。

**自尊感情を分類する変数と自己愛に含まれる成分の対応**　3つの変数は測定方法において大きく異なっているが，すべて肯定的自己評価をもつこと（もとうとすること）に含まれうる，外的な評価に敏感で影響を受けやすいという性質を扱おうとしている点で共通している。また，そのような性質をもつことによって，自己高揚的，防衛的な過程に従事しやすくなるという仮定においても一致している。

3つの変数が扱おうとする性質や概念的仮定は，自己愛を分類する成分（過敏性）と非常に類似している。たとえば，潜在的な自尊感情に関する議論と類似して，自己愛者が表面的（顕在的）なレベルでの誇大性によって根深い（潜在的な）劣等感を覆い隠しているという議論もなされている（“Mask” model; Bosson, Lakey, Campbell, Zeigler-Hill, Jordan, & Kernis, 2008）[2]。自尊感情と自己愛ではそもそも扱おうとしてきた肯定期自己評価のレベルや質に違いがあり，異なるものとして議論されてきたものの，結局は自己報告する肯定的自己評価が含む性質やそれらが導く過程について，同様の枠組みからアプローチしようとしているといえるのではないだろうか。

しかし，変数間の相関関係からは，これらが同一のものを測定していると指摘できるほど強いものではないことが示され，なかにはほとんど無関連であることを示す知見もある。たとえばKernis et al.（2008）は，自尊感情の不安定性と随伴性自尊感情，潜在自尊感情の相互相関を検討し，弱～中程度の相関関係（|$r$|=.24-.51）にあることを示している。Zeigler-Hill（2006）は，潜在自尊感情（IAT，NLT）と自尊感情の不安定性がほぼ無相関であることを示している（ともに$r$=-.04）。小塩（2001）は過敏性に関連すると考えられる「注目・賞賛欲求」が，自尊感情の変動性（Rosenberg, 1965）や不安定性の関連がごく弱いことを報告している。また，Zeigler-Hill, Clark, & Pickard（2008）は，自己愛の2側面領域ごとの随伴性自尊感情の関連について検討を行い，7領域と2側面との関連が-.22<$r$<.42の範囲であることを報告している。これらのことからは，過敏性や自尊感情を分類する諸変数が，同様のことを想定しているものの，脆弱な肯定的自己評価の異なる側面に焦点化するものであることが推測される。

## 肯定的自己評価の諸側面

以上の議論から，肯定的な自己評価は概念的に，そのレベルと質，すなわちそれが適度か過度か，外的評価に過敏で影響を受けやすいか（脆弱か）どうかという2つの軸により分類することができるだろう。実際，新見・川口・江村・越中・目久田・前田（2007）は2次因子分析を用い，自己愛の4つの側面と自尊感情の3つの側面から自己を受容する程度と他者評価を気にする程度という2つの高次因子を見出しており，この知見を，この考えを支持するものとして位置づけることができる。

このような観点から肯定的自己評価の成分を的確に捉えることにより，種々の現象に対する自己評価の説明力はより高まると考えられる。しかし，脆弱な自己評価を扱う諸変数はそれほど強い関連をもっておらず，対人関

2　Zeigler-Hill（2006）では，自己愛（NPI総得点）と自尊感情が潜在的自尊感情，自尊感情の不安定性とそれぞれほぼ無相関であることが示されている。また，Bosson et al.（2008）は，メタ分析の結果から，自己愛と自尊感情の（不）安定性および自尊感情のレベルと不安定性の交互作用がともにほぼ無関連であること（11の研究，1349名のデータ，$r$=-.01, -.04），潜在的自尊感情および顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の交互作用項がほぼ無関連であること（約10の研究，1000人以上のデータを使用，-.02<$r$<.09），随伴性自尊心ともほぼ無相関であること（5つの研究，554名のデータ，$r$=-.06）を示している。ここからも，自尊感情を分類する変数と自己愛を分類する過敏性がともに高い自己評価を分類する変数としての役割を果たすことが推測される。

係や社会的行動，精神的健康に対して異なる予測力をもつ可能性がある。

そこで，ここでは，肯定的自己評価のレベル（適度または過度）と質（脆弱さ）が説明してきた現象について，先行研究を概観する。また，過度でなく脆弱でもない，“真”の自尊感情についての議論について取り上げ，このような自尊感情を実証的に扱った先行研究の知見についても紹介する。その上で，肯定的自己評価の諸側面を捉えるモデルを提示する。

**過度な肯定的自己評価が予測するもの**

**自己愛の誇大な側面**　尺度内容（特に優越感・有能感の尺度内容）からも見て取れたように，自己愛が扱う過度な肯定的自己評価は，自分を他者よりもよいものと見積もることと関連している。そして先に示したように，自己愛を2成分に分類する研究では，自己愛を，過度な自己評価を反映する側面（Grandiosity＝誇大性）と脆弱な自己評価を反映する側面（Vulnerability＝脆弱性）から捉えている。

自己愛の誇大な側面に関し，Wink（1991）は，これに対応する側面が，自己報告や他者報告に現れる行動的な特徴（攻撃的，主張的など）と関連することを示している。同様に小塩（2002a）は，優越感・有能感および自己愛総合が，友人から外向的で強いと評価されることと関連することを示している。

対人関係の特徴に関し，小塩（2006）は，優越感・有能感が，グループ活動における他者評定のうち，コミットメントの他者評定（グループの集まりで積極的に発言した，よい意見を述べた，など）に対して負の予測力を持つことを示し，自己愛的な優越感・有能感の高いものが，個人の利益を優先するあまり，集団の利益を考慮しない可能性を示唆している。また，中山・岡田（2008）は，未知の2人による対人相互作用場面を観察し，誇大性が関係初期における注視の少なさを予測することを示している。このような特徴は対人関係の悪化を招きそうであるが，小塩（1999）は，優越感・有能感が，学年末に近い時期の学級における所属集団や親友の獲得，ゲス・フー・テストにより特定される好意度の高さや友人の多さを予測することを示しており，主張の強さや自己奉仕的な他者評価が必ずしも対人関係に負の効果をもたらさないことが示唆される。

また，精神的健康との関連について，Wink（1991）は，自己愛の誇大な側面が抑うつ，不安，敵意，怒りやwell-beingを予測しないことを示唆する結果を得ており，同様の傾向が中山・中谷（2006）においても確認されている。また，中山・小塩（2007）は，縦断的な方法（3か月間）を用い，誇大な側面が抑うつや怒りを予測しないことを示している。ただし，小塩・中山（2007）は，優越感・有能感はネガティブライフイベントを経験しない場合には抑うつを低めるが，経験数が多い場合には負の予測力を失うことを示しており，ここからは，誇大な自己愛が，ストレスが少ないときにのみ精神的健康にポジティブな影響をもたらすことが示唆される。

**自己拡大・自己高揚**　Taylor & Brown（1994）は，自分を他者（平均的な他者）よりも良いと知覚し評価する傾向を，自己拡大（Self-aggrandizement）と定義している。この傾向は，たとえば「同じ大学に通う一般的（平均的）な大学生と比べてあなたは・・・」と教示して形容詞への評定を求める方法（外山・桜井，2000）や，自己に対する評価と集団内の他者に対する評価を尋ね，他者評価の平均値と自己評価の差を求める方法（Robins & Beer, 2001）により測定される[3,4]。

類似の現象として，他者（あるいは客観）評定よりも高い自己評価をすることが挙げられる。このような傾向は自己高揚（Self-enhancement, Paulhus, 1998）と呼ばれ，これについても自己愛（総得点）との弱い正の関連が報告されている（John & Robins, 1994, Study 1; $r$=.13, $p$<.05）。自己高揚は，他者（客観）評定と自己評定の差により操作的に定義される（たとえばBrendgen, Vitaro, Turgeon, Poulin, & Wanner, 2004; Robins & Beer, 2001; 外山，2008）。

自己拡大や自己高揚は適応や精神的健康につながるとされ（Taylor & Brown, 1988, 1994），この考えを支持する知見がいくつも提出されてきた。例えば，Brendgen et al.（2004）は短期縦断的検討の結果，仲間との関係における自己拡大傾向をもつ児童が，時間経過とともに仲間から好かれたり，仲間関係の安定性を獲得すること，抑うつ感情を低下させることを示している。また，外山・桜井（2000）は，自己拡大傾向のある人のストレス反応（抑うつ，怒り感情など）が正確な自己認知をする人に比べて低いことを示している。関連して，Robins & Beer（2001）は，自己高揚的な人が，成功を能力や努力に帰属して運には帰属せず，成功した状況を重要とみな

3　自己拡大や自己高揚について，自己愛や自己欺瞞(Self-deception)などの尺度をその指標として用いた研究もあるが，本論文では，定義に基づき厳密に測定された自己拡大，自己高揚が示してきた知見のみを取り上げている。

4　自己拡大と自己愛（総得点）は弱い正の相関関係にあることが示されているが（Robins & Beer, 2001, Study 1; $r$=.11, $p$<.05），誇大性との関連はこれまで検討されていない。

すが，失敗は能力に帰属しないことを示している。

しかし近年，自己拡大や自己高揚が必ずしもポジティブな影響をもたらさないことを示唆する研究知見もいくつか提出されている。たとえばRobins & Beer (2001)は，自己拡大と自己高揚が，短期的（課題後）にはポジティブな感情を高めるが（Study 1），長期的（4年後）にはwell-beingを低め，学業からの離脱を促進することを示している（Study 2）[5]。Paulhus（1998, Study 2）は，自己高揚が短期的（出会った直後）には面白く，温かいと評定されることと正の関連を示すが，長期的（7週目）には，温かくなく，防衛的で敵意的と評定されることと関連することを示している。また，外山（2008）は自己高揚が仲間評定による攻撃性の高さと関連することを示している。

他の研究知見からは，自己拡大や自己高揚が導く結果が，素因との組み合わせにより特定されることが予想される。Brendgen et al. (2004)では，もともと攻撃的であった子どものみが，時間経過とともに攻撃性を高めることが示され，同様に外山（2006）は，もともと攻撃的である子どもにおいては自己高揚が8ヶ月後における攻撃行動の増加を予測することを示しており，さらに，ストレス反応があらかじめ高い子どもにおいては，自己高揚がストレス反応の低減を導くことを報告している。

**脆弱な肯定的自己評価が予測するもの**

**自己愛の過敏な側面**　Wink（1991）は，「傷つきやすさ - 敏感さ」が精神的健康やwell-beingと負の関連をもつことを示している。中山・中谷（2006）も，評価過敏性が精神的健康と負の関連を持つことを示している。清水ら（2008）もまた，誇大な側面と過敏な側面により特定されるタイプごとの抑うつや怒り，無気力について比較検討し，これらの特徴が，過敏な側面を強くもつ群（誇大 - 過敏特性両向型，過敏特性優位型）において高く報告されることを示している。

中山・小塩（2007）は，短期縦断的検討を行い，「評価過敏性」が3ヶ月後の抑うつ，怒り感情を有意に予測することを示している。しかし，過敏性が抑うつや怒り感情に対して及ぼす効果は，自我脅威的なネガティブライフイベントの経験数によって調整され，多く脅威を経験した群に見られる効果であることも示されている（Nakayama, 2008）。同様に，小塩（2002b）は，ネガティブイベントの経験と注目 - 主張成分との交互作用が落ち込みを有意に予測し，注目・賞賛欲求が有意である者がネガティブイベントを経験した後により大きな落ち込みを感じる傾向があることを示している。また，小塩・中山（2007）は，注目・賞賛欲求がネガティブライフイベントの経験数が多い場合に抑うつや怒りを高めることを示している。

対人関係に関し，小塩（2002a）は，注目 - 主張が友人から調和性があると評価されることを示し，注目賞賛欲求が強いものほど，友人から調和的で弱い人間であると認識される傾向があることや，自己愛総合が高く注目・賞賛欲求も高い人が対人恐怖的で間接的な攻撃を行い，同様に自己愛総合が高くても自己主張性が高い人は対人恐怖傾向を示さず言語的な攻撃を行うことを示している。また，小塩（1999）は，注目・賞賛欲求が優越感・有能感と同様，所属集団や親友の獲得，ゲス・フー・テストにより特定される好意度の高さや友人数の多さを予測することを示している。さらに，中山・岡田（2008）は，対人相互作用場面を観察し，過敏性が関係初期におけるうなずきの多さと注視の少なさを予測することを示している。

**不安定な自尊感情**　Kernis et al.（1989）は，自尊感情のレベルではなく不安定性が敵意と関連し，レベルと不安定性の交互作用が怒りを予測することを報告している。Kernis et al. (1993)は，自尊感情の不安定性がフィードバックの正確さを高く見積もる傾向と関連することを示している。また，自尊感情のレベルと不安定性，フィードバックタイプの交互作用が見られ，自尊感情の高い人はポジティブなフィードバックを正確であると判断したり評価者を有能であると判断する傾向があるが，自尊感情の低い人はネガティブなフィードバックを正確であると判断したり，評価者を有能であると判断する傾向などを明らかにしている（Kernis et al., 1993）。また，Kernis et al.（1992）は，自尊感情の高い人たちにおいては自尊感情の不安定性が失敗後ではなく成功後により多く弁解（excuse making; たとえば，うまくできる能力を過小評価する，やる気を過小評価する）を行うことに関連し，それに対し，自尊感情が低い人たちにおいては，成功後ではなく失敗後により多く弁解を行うことに関連することを示している。

Kernis, Grannemann, & Mathis（1991）は，自尊感情のレベルと不安定性が抑うつ傾向に及ぼす効果を検討しており，その結果，単純相関からは自尊感情のレベルの効果のみが有意な値であり，不安定性の効果はほとんど示されていないが（$r$=.19, $ns$），自尊感情のレベルと不安定性の交互作用が抑うつに対して有意な影響を持ち，自尊感情が低い場合には安定性が高いほど抑うつ的であるが，自尊感情が高い場合には，不安定であるほど抑うつ傾向が高いことを示している。Kernis et al. (2008)は，

5　なお，Study 2では自己高揚の指標のみを用いている。

自尊感情のレベルと不安定性の交互作用が言語的防衛に対して有意な予測力を持ち，自尊感情のレベルと不安定性がともに高い人たちが，最も高い言語的防衛を示すことを報告している。また，脇本（2008）は援助志向性について検討し，自尊感情のレベルと不安定性の交互作用が被援助志向性，援助要請総数，家族以外の他者への援助要請数に対して予測力を持ち，自尊感情が高く不安定性も高い場合に，特に被援助志向性や援助要請数（総数，家族以外への要請数）が低いことを示している。

しかしRoberts, Kassel, & Gotlib（1995）は3つの研究を行った結果，抑うつ傾向に対して，自尊感情の安定性の効果は主効果，交互作用ともにほとんど見られないことを報告し，Kernisら（Kernis et al.,1991）の結果はあてにならないものであると批判している。これに関し，Roberts & Kassel（1997）は，自尊感情のレベルと安定性，ライフストレスによる2次の交互作用が抑うつ傾向を予測することを示している。Kernis, Whisenhunt, Waschull, Greenier, Berry, Herlocker, & Anderson（1998）は，4-5週間間隔での縦断的検討により，日常的なストレスイベント（daily hassles）が抑うつに及ぼす影響における自尊感情のレベルと安定性の調整効果を検討し，その結果，自尊感情のレベルは効果を持たないが，安定性はストレスイベント数と交互作用的に抑うつに影響を及ぼすことを明らかにしている。これらのことからは，自尊感情の不安定性は，ネガティブなフィードバックや失敗などのストレスにより認知や精神的健康に与えられる影響を調整するものとして機能していることが推測される。

**顕在的，潜在的自尊感情のずれ**　高い自尊感情が必ずしも良い結果を導かないという文脈からは，高い顕在的自尊感情と低い潜在的自尊感情という組み合わせが，ネガティブな結果を導くことが予想される。これと一貫して，Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll（2003）は，顕在的自尊感情が高い者において，IATにより測定された潜在的自尊感情が低いほど，内集団バイアスを示すこと（Study 2）や，認知的不協和事態において，その解消に強く動機づけられていること（Study 3）を示唆する結果を得ている。Bosson, Brown, Zeigler-Hill, & Swann（2003）は，顕在的自尊感情（Self-liking subscale, Tafarodi & Swann, 1995）が高く潜在自尊感情（NLT）が低い人は自尊感情がともに高い人に比べて，あまりよくないフィードバックを得たときに，自己高揚の傾向をより多く示し，失敗に対して過度に楽観的であり，理想自己と現実自己の一致を高く報告することを示している。

しかし，低い顕在的自尊感情と高い潜在的自尊感情という組み合わせもまた，ネガティブな結果を導くことが指摘されている。たとえばKernis, Lakey, & Heppner（2008）は，自我脅威的な自己関連情報に対する言語的防衛について，潜在的自尊感情（NLT）の主効果および自尊感情の高さ×潜在自尊心の交互作用がみられることを示している。彼らによれば，自尊感情の高い人では潜在的自尊感情が高いほど防衛的でなくなり，自尊感情の低い人の間では，潜在的自尊感情が高いほど，防衛的でなくなる。また，自尊感情の一貫性の高い人（潜在・顕在の一致度の高い人）が最も防衛的でない。Schröder-Abe, Rudolph, & Schütz（2007, Study 1）は，怒り（抑圧，顕在化，コントロール）について検討し，高い顕在的自尊感情[6]と低い潜在的自尊感情（IAT）を持つ人とともに，低い顕在的自尊感情と高い潜在的自尊感情，怒りの抑圧（怒りを感じているが隠している）を強く示し，怒り抑圧の程度は後者でより高いことを示している。また，成功，失敗への帰属や神経質さ，体調の悪かった日数に関しての検討からは，顕在的依存感情と潜在的自尊感情（IAT）の交互作用がそれぞれの変数に対して有意な効果を持ち，帰属や神経質さに対しては顕在的自尊感情が高い場合には潜在的自尊感情の予測力はないが，顕在的自尊感情が低い場合，潜在的自尊感情が高いほど，失敗に対して内的，全体的，安定的な帰属傾向や神経質な性格傾向を示すこと，体調が悪い日数に関しては，高い顕在的自尊感情と低い顕在的自尊感情の両方に対して潜在的自尊感情の調整効果が見られることが示されている（Schröder-Abe et al., 2007, Study 2）。これらの結果からは，高い顕在的自尊感情と低い潜在的自尊感情のずれの実を問題にするのではなく，顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の高低により定義される両方向へのずれが，ネガティブな結果の予測因となることが示唆される。

**随伴した自尊感情**　Neighbors, Larimer, Geisner, & Knee（2004）は，大学生における制御志向性（controlled orientation＝環境からプレッシャーを感じ自分自身の行動を制御できていないと思う傾向）と飲酒に対する動機づけとの関連が随伴性自尊感情により媒介されることを示している。Patrick, Neighbors, & Knee（2004）は，女性のみを対象とした研究から，随伴性自尊感情の高い女性が人気雑誌に掲載されている広告モデルとの社会的比較のしやすさや広告評価課題の後のより悪い気分を報告し，なかでも特に魅力に対する自己評価が低い場合

6　Study1, 2とも，顕在的自尊感情の測定には多面的自尊感情尺度（Multidimensional self-esteem scale; Schütz & Sellin, 2006）が用いられている

に，随伴性の高さが社会的比較の多さやポジティブ気分の減少，抑うつ気分の増加を予測することを示している（Study 1）。また，Patrick et al.（2004, Study 2）では，随伴性自尊感情の高い女性が抑うつ的であることに関し，随伴性自尊感情の高さが社会的比較（上方比較）の関数としてネガティブ感情を高めるという媒介モデルについて検討し，仮説を支持する結果を得ている。

随伴性自尊感情に関して，自尊感情のレベルとの交互作用効果は明確でない。Kernis et al.（2008）は，言語的防衛に対して自尊感情と随伴性自尊感情の交互作用が有意であることを明らかにし，高い自尊感情をもち，随伴性自尊感情が低い人が最も言語的防衛が少ないことを示している。しかし，Kernis et al.（2008）によれば，Paradis（1999）は，自尊感情のレベルにかかわらず，高い随伴性自尊感情が評価的な脅威に対する反応としての怒りや敵意的反応の取りやすさを予測することを示している。

領域ごとの随伴性自尊感情（自己価値の随伴性）について，Crocker & Luhtanen（2003）は，学業的な自己価値への随伴性が，学業上および経済的な問題を予測することを示している。Park & Crocker（2005）は，自尊感情が高く学業的自己価値への随伴性が高い人が，特に自我脅威（テストに失敗したというフィードバック）を受けた場合に，他者（相互作用の相手）に対してよりサポーティブでなく，好ましくないという評価を行い，その結果として，相手からもサポーティブでなく好ましくないという評価を受けることを明らかにしている。また，Crocker , Sommers, & Luhtanen（2002）は，自己価値を学業に随伴させている学生が，大学院からの拒絶を受けたときに自尊感情の低下を経験することを示しており，同様にCrocker, Karpinski, Quinn, & Chase（2003）は，学業領域への随伴性を持つ女性が，専攻している領域での悪い成績に対して，より大きく（状態的な）自尊感情を低下させることを示している。

**適度で安定的な自己評価が導くもの**

過度でなく脆弱でもない“真”の肯定的自己評価とは何であろうか。先に述べたように，自尊感情は自己高揚的要素や脆弱性を含む可能性があり，必ずしも適度で安定した自己評価とは言えないことが推測される。そのため，適度で安定した自己評価に関する知見はほとんど見つけることができない。

しかし近年，Kernis（2003）は最良の自尊感情（optimal self-esteem）という概念を提案し，伊藤ら（伊藤・小玉，2005, 2006）はこの概念化に基づく研究を行っている。Kernis（2003）によれば，最良の自尊感情は特定の課題結果や達成に自己価値の感覚を随伴させず，文脈による変動がなく，真の，あるいは中核的な自己によって自己が機能しているという感覚から得られるものであり，このような概念化は，先に述べてきたような，優越感に根ざし，あるいは脆弱であるような肯定的自己評価の要素を完全に排除したものであると言えるだろう。

このような自尊感情に含まれる様々な側面のうち最も重要な性質はauthenticity（真正）と呼ばれるが，伊藤らはこれを“本来感”と訳し，その測定を行っている。本来感は自尊感情と中程度の正の相関を示すが（$r$=.64, $p$<.01），自己価値の随伴性に関して，自尊感情よりも高い負の相関（$r$=-.35, $p$<.01）を示し，自尊感情と自己価値の随伴性に見られた相関関係（先述）は，本来感の影響を制御することによりほとんど見られなくなることが明らかにされている（$r$=-.03, *ns*, 自尊感情を制御した場合の本来感と随伴性の関連は$r$=-.26, $p$<.01; 伊藤・小玉，2006）。

伊藤・小玉（2005）は，抑うつや人生における目的に対しては本来感と自尊感情が同程度の影響を与えるが，不安，人格的成長，積極的な他者関係に対しては本来感のみが，人生における満足には自尊感情のみが効果をもつことを明らかにしている。また，伊藤・小玉（2006）は，本来感，自尊感情，自尊感情の随伴性が大学生の主体的な自己形成に与える影響を検討しており，本来感が自律性に正の影響をもたらす一方で自己価値の随伴性は負の影響をもたらすこと，本来感と自己価値の随伴性はともに現状改善意識に影響を与えること，自尊感情は自己形成にかかわるいずれの変数に対しても影響をもたらさないことを示している。

**肯定的自己評価の諸側面を捉えるモデル**

自尊感情と自己愛により扱われる肯定的自己評価は，レベルと質により分類することができ，過度な肯定的自己評価や脆弱な自己評価は，いずれも肯定的な自己評価へのこだわりという点では共通しているものの，それぞれ異なる結果を導くと考えられる（Figure 2）。

過度に肯定的な自己評価を扱う誇大性と自己高揚は，高いレベルの自己評価を保つための様式に関連していた。過度に肯定期な自己評価は，それを自ら保障するための自己高揚的な認知・行動様式を導き，そのような様式が，対人的側面において，他者（仲間）から強い，攻撃的（アグレッシブ）などと評定されることにつながると考えられる。このような傾向を持つことは，短期的には肯定的な印象を受けるが，長期的には必ずしも肯定的な結果をもたらさないようである。ただし，良い結果をもたらすことを示す知見もあり，どのような社会的影響がもたらされるかは，他の要因（環境や文脈，脆弱性を伴うかどうかなど）に依存していることが推測される。

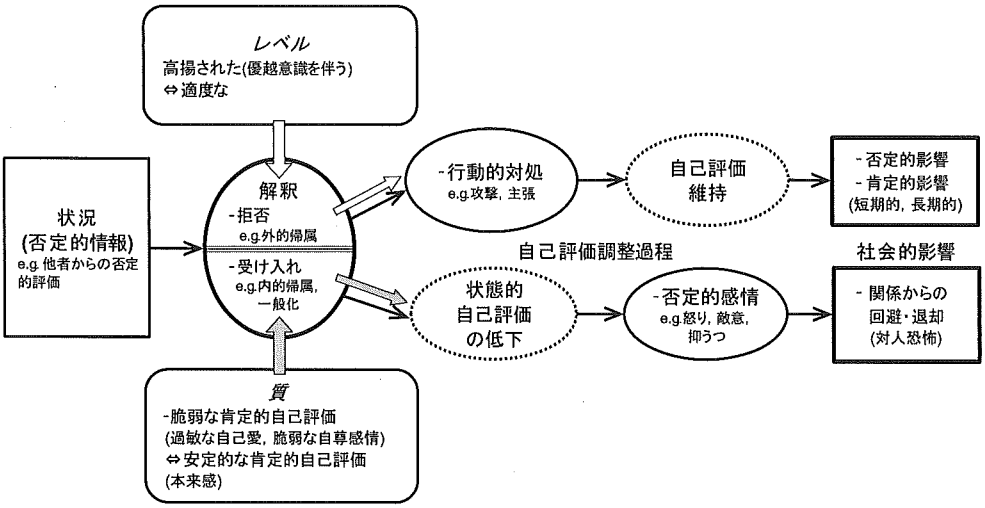


Figure 2　肯定的自己評価のレベルと質が自己への否定的情報への対処に及ぼす影響

さらに，ストレス量や素因を考慮した研究知見からは，抑うつや怒りなどを指標とする精神的健康もまた，他の要因と交互作用的に決まるものであることが予想される。

一方，過敏性や脆弱な自尊感情に関する諸変数が扱う脆弱な自己評価は，精神的健康に対するネガティブな影響や他者に対する否定的感情（敵意や怒り）をもたらしうるものであることが示唆された，特に，ストレスフル（自我脅威的）な出来事を経験した場合に，直接的に，あるいは自己評価のレベルと交互作用的に，抑うつ，敵意などの感情や回避的，防衛的な認知や行動を増加させていた。このような結果に関し，Kernis et al.（1998）は，自尊感情の不安定性が，失敗またはネガティブな出来事を過度に一般化して帰属すること示している。また，Holden（2004）は，過敏性がネガティブなライフイベントに対する内的，安定的，全体的な帰属様式と関連することを示している。これらの知見を合わせて考えると，脆弱な自己評価が，ネガティブな出来事や外的な評価を過度に取り入れたうえで，精神的健康の悪化とともに評価をもたらした者をはじめとする他者への過剰な反応を導くという過程が推測される。

過度な肯定的自己評価と脆弱な自己評価は，外的な評価を受けうる状況（広く言えば対人場面）における自己高揚，自己防衛に関連しているという点で共通している。しかし，自己に関するネガティブな情報を受け取った場合，両者が導く過程は異なるものと考えられる。すなわち，過度な自己評価はネガティブな情報をその場で認知的に切り離したり（たとえば外的帰属），意見を聞き入れない，頑固に，あるいはアグレッシブに対応するなど，行動として排除する方向に動機づけることが予想され，脆弱な自己評価は，評価を受け止めたうえで（内的帰属や一般化），情報源である他者に敵意や怒りを感じたり，そのような場から退却したり（対人恐怖的になったり）という方向に動機づけることが予想される。

なお，過度な肯定的自己評価と脆弱な自己評価の間には，ほとんど相関がないことから，これらの過程は個人内で同時に起こりうるものと考えられる。

## 今後の課題

本論文では，「肯定的自己評価」という共通点から，自尊感情と自己愛について，諸変数との関連や操作的定義，それぞれの下位分類の必要性を指摘する理論的枠組みやそれに基づく研究知見を比較しながら概観した。両者に関する研究知見はそれぞれ膨大であり，また，両者を質的に分類する諸変数（過敏性，自尊感情の不安定性など）に関する知見は蓄積されている途上であるため，両者を理解する枠組みとして本論文が提案したモデルには，さらなる知見の統合による精緻化と改良が必要である。

最後に，今後の課題として，次の3点を挙げておきたい。1点目は，本論文で提案した枠組みに基づき，多様性を考慮したうえで肯定的自己評価を扱い，その影響を検討することである。自尊感情の否定的側面に着目する研究は増加しているものの，自尊感情と自己愛はその起源やそもそもの定義により概念的に区別され，自尊感情をそのまま精神的健康の指標として捉えている研究も多いのが実状である。しかし，本研究において概観した内容からは，肯定的自己評価をもつ人に対し，既存の尺度

を用いて“自尊感情の高い人”，“自己愛者”という2つのラベルのどちらかを貼ることにはあまり大きな意味がないことが見て取れるだろう。

2点目は，自尊感情や自己愛の効果がどのような状況において発揮されやすいのかを考慮して調査・実験状況を決定し，検討を行うことである。いくつかの研究において，ストレス量など当人が置かれた状況が，過度または脆弱な肯定的自己評価の導く結果を促進または抑制することが示された。このような結果は，肯定的自己評価におけるそれらの性質が，自己評価を高揚・維持・防衛しようとして機能するという見方からは当然のものとして理解されよう。しかし，これまで，実験的にネガティブな自己関連情報（自我脅威）を扱うにしても，それが当人にとってどのような意味を持つ情報なのかということについてはほとんど考慮されてこなかった。Crockerらが指摘するように，個々人にとって，自己価値が付随する状況は異なっている可能性がある。状況の意味に関心を置き，多くの人に共通しうる状況や，個々人にとっての重要領域を特定したうえで，検討を行っていく必要があるだろう。

3点目は，肯定的自己評価を扱う諸変数の関連について，さらに検討を行うことである。Kernis et al.（2008）などによって示されていたように，自尊感情の不安定性，潜在的自尊感情などの諸変数は，類似した現象に焦点を当てているにもかかわらず，それほど強い関連をもっていない。ある現象（たとえば言語的防衛）について，これらの変数がそれぞれ独自の効果を持つことも示されているが，現状では，現象との対応について，それぞれの変数がもつ意味を考慮しながら弁別的に解釈を与えることは難しい。不適応的な肯定的自己評価の背景を解明し，適切な視点やアプローチを得るためには，各変数に関する知見を蓄積し，変数の持つ意味についてさらに追及するとともに，改めて知見の統合を行っていくことが求められる。

## 引用文献


Adams, G. R., Ryan, B. A., Ketsetzis, M., & Keating, L. (2000). Rule compliance and peer sociability: A study of family process, school-forced parent-child interactions, and children's classroom behavior. *Journal of Family Psychology*, 14, 237-250.

American Psychiatric Association (1980). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition : DSM*-Ⅲ. Washington, D.C.; Author

American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition : DSM*-Ⅳ. Washington, D.C.; Author

Ang, R. P., & Yusof, N. (2005). The relationship between aggression, narcissism, and self-esteem in asian children and adolescents. *Current Psychology: Developmental・Learning・Personality・Social.* Summer2005, 24, 113-122.

Barry, C. T., Grafeman, S. J., Adler, K. K., & Pickard, J. D. (2007). The relations among narcissism, self-esteem, and delinquency in a sample of at-risk adolescents. *Journal of Adolescence*, 30, 933-942.

Battistich, V., Solomon, D., & Delucchi, K. (1993). Interaction processes and student outcomes in cooperative learning groups. *The Elementary School Journal*, 94, 19-32.

Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.

Baumeister, R. F., Heatherton, T. F., & Tice, D. M. (1993). When ego threat lead to self-regulation failure: Negative consequences of high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 141-156.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.

Baumeister, R. F., & Tice, D. M. (1985). Self-esteem and responses to success and failure: Subsequent performance and intrinsic motivation. *Journal of Personality*, 53, 450-467.

Baumeister, R. F., Tice, D., & Hutton, D. (1989). Self-presentation motives and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality*, 57, 547-579.

Biscardi, D., & Schill, T. (1985). Correlations of narcissistic traits with defensive style, Machiavellianism, and empathy. *Psychological Reports*, 57, 354.

Bishop, J. A., & Inderbitzen, H. M. (1995). Peer acceptance and friendship: An investigation of their relation to self-esteem. *Journal of Early Adolescence*, 15, 476-489.

Bosson, J. K., Brown, R. P., Zeigler-Hill, V., & Swann, W. B. (2003). Self-enhancement tendencies among people with high explicit self-esteem: The moderating role of implicit self-esteem. *Self and Identity*, 2,

1679-187.

Bosson, J. K., Lakey, C. E., Campbell, W. K., Zeigler-Hill, V., Jordan, C. H., & Kernis, M. H. (2008). Untangling the links between narcissism and self-esteem: A theoretical and empirical review. *Social and Personality Psychology Compass 2/3*. 1415-1439.

Brendgen, M., Vitaro, F., Turgeon, L., Poulin, F., & Wanner, B. (2004). Is There a Dark Side of Positive Illusions? Overestimation of Social Competence and Subsequent Adjustment in Aggressive and Nonaggressive Children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 32, 305-320.

Brown, R. P., & Zeigler-Hill, V. (2004). Narcissism and the non-equivalence of self-esteem measures: A matter of dominance? *Journal of Research in Personality*, 38, 585-592.

Buhrmester, D., Furman, W., Wittenberg, M. T., & Reis, H. T. (1988). Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 991-1008.

Bushman, B. J. & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: does self love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.

Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (2002). Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Research in Personality*, 36, 543-545.

Campbell, J. D., & Fehr, B. A. (1990). Self-esteem and perceptions of conveyed impressions: Is negative affectivity associated with greater realism? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 122-133.

Campbell, K. W., Rudich, E. A., & Sedikides, C. (2002). Narcissism, self-esteem, and positivity of self-views: Two portraits of self-love. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 358-368.

Carroll, L. (1987). A study of narcissism, affiliation, intimacy, and power motives among students in business administration. *Psychological Reports*, 61, 355-358.

Crocker, J., Karpinski, A., Quinn, D. M., & Chase, S. K. (2003). When grades determine self-worth: Consequences of contingent self-worth for male and female engineering and psychology majors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 507-516.

Crocker, J., Luhtanen, R. K., Cooper, M. L., & Bouvrette, A. (2003). Contingencies of self-worth in college students: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 894-908.

Crocker, J., & Park, L. E. (2003). Seeking self-esteem: Construction, maintenance, and protection of self-worth. In M. R. Leary and J. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity* (pp. 291-313). New York: Guilford.

Crocker, J., & Park, L. E. (2004). Costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, 130, 392-414..

Crocker, J., Sommers, S. R., & Luhtanen, R. K. (2002). Hopes dashed and dreams fulfilled: Contingencies of self-worth and admissions to graduate school admissions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 1275-1286.

Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingency of self-worth. *Psychological Review*, 108, 593-623.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). The general causality orientations scale: Self-determination in personality. *Journal of Research in Personality*, 19, 109-134.

Diener, E., & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653-663.

Emmons, R. A. (1984). Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory, *Journal of Personality Assessment*, 48, 291-300.

Emmons, R. A. (1987). Narcissism: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 291-300.

遠藤辰雄　(1992). セルフ・エスティームの定義と展望　遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編)　セルフ・エスティームの心理学―自己価値の探究　ナカニシヤ出版 (pp.8-25).

遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) (1992).　セルフ・エスティームの心理学―自己価値の探究　ナカニシヤ出版

榎本博明　(1998).「自己」の心理学―自分探しへの誘い―　サイエンス社

Exline, J. J., Baumeister, R. F., Bushman, B. J., Campbell, W. K., & Finkel, E. J. (2004). Too proud to let go: Narcissistic entitlement as a barrier to forgiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 894-912.

Farnham, S. D., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R.

(1999). Implicit self-esteem. In D. Abrams, & M. A. Hogg (Eds.), *Social Identity and social cognition* (pp.230-248). Oxford, UK: Blackwell.

Furham, A., & Cheng, H. (2000). Lay theories of happiness. *Journal of Happiness Studies*, 1, 227-246.

Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.

Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic personality in clinical practice. : The DSM-* Ⅳ *edition.* Washington, DC. : American Psychiatric Press.

Gabriel, M. T., Critelli, J. W., & Ee, J. S. (1994). Narcissistic illusion in self-evaluation of intelligence and attractiveness. *Journal of Personality*, 62, 143-155.

Glendinning, A., & Inglis, D. (1999). Smoking behaviour in youth: The problem of low self-esteem? *Journal of Adolescence*, 22, 673-682.

Gray-Little, B., Williams, V. S. L., & Hancock, T. D. (1997). An item response analysis of the Rosenberg Self-Esteem Scale. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 443–451.

Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.

Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 1022-1038.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.

Hartmann, H. (1964). *Essays on Ego Psychology.* New York: International University Press.

Heatherton, T. F., & Vohs, K. D. (2000). Interpersonal evaluations following threats to self: Role of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 725-736.

Hendin, H M., & Cheek, J. M. (1997). Assessing hypersensitive narcissism: A reexamination of Murray's narcissism scale. *Journal of Research in Personality*, 31, 588-599.

Hendrick, S. S., Hendrick, C., & Adler, N. L. (1988). Romantic relationships: Love, satisfaction, and staying together. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 980-988.

Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relations: An exploratory study. *Psychoanalytic Psychology*, 9, 489-508.

Hickman, S., Watson, P., & Morris, R. (1996). Optimism, pessimism, and the complexity of narcissism. *Personality and Individual Differences*, 20, 521-525.

Holden, M. (2004). *Causal attributions among overt and covert narcissism subtypes for hypothetical, retrospective, and prospective events.* Unpublished doctoral dissertation, Ohio University.

伊藤正哉・小玉正博　(2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討―本来感，自尊感情並びにその随伴性に注目して― 教育心理学研究，54, 222-232.

Jang, S. J., & Thornberry, T. P. (1998). Self-esteem, delinquent peers, and delinquency: A test of the self-enhancement hypothesis. *American Sociological Review*, 63, 586-598.

Jordan, C. H., Spencer, S. J.,& Zanna, M. P. (2005). Types of high self-esteem and prejudice: How implicit self-esteem relates to ethnic discrimination among high explicit self-esteem individuals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 693-702.

Jordan, C. H, Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969- 978.

川崎直樹・小玉正博　(2007).　親和動機のあり方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向　パーソナリティ研究，15，301-312.

Keefe, K., & Berndt, T. J. (1996). Relations of friendship quality to self-esteem in early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, 16, 110-129.

Kernberg, O. F. (1970). Factors in the psychoanalytic treatment of narcissistic personalities. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 18, 51-85.

Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.

Kernis, M. H. (2005). Measuring self-esteem in context: The importance of stability of self-esteem psychological functioning. *Journal of Personality*, 73, 1569-1605.

Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C., Berry, A., & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low: The importance of stabil-

ity of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 1190-1204.

Kernis, M. H., & Goldman, B. N. (2006) Assessing stability of self-esteem and contingent self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.). *Self-Esteem: Issues and Answers: A Sourcebook of Current Perspectives.* (pp. 77-85). New York, Psychology Press.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1992). Stability of self-esteem: Assessment, correlates, and and excuse making. *Journal of Personality*, 60, 621-644.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis. L. C. (1991). Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 80-84.

Kernis, M. H., Lakey, C. E., & Heppner, W. L. (2008). Secure versus fragile high self-esteem as a predictor of verbal defensiveness: Converging findings across three different markers. *Journal of Personality*, 76, 477-512.

Kernis, M. H., Paradise, A. W., Whitaker, D. J., Wheatman, S. R., & Goldman, B. N. (2000). Master of one's psychological domain? Not likely if one's self-esteem is unstable. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1297-1305.

Kernis, M. H., Whisenhunt, C. R., Waschull, S. B., Greenier, K. D., Berry, A. J., Herlocker, C. E., & Anderson, C. A. (1998). Multiple facets of self-esteem and their relations to depressive symptoms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 657-668.

Kohut, H. (1971). *The analysis of the self.* Madison, WI: International Universities Press.

Lakey, B., Tardiff, T. A., & Drew, J. B. (1994). Negative social interactions: Assessment and relations to social support, cognition, and psychological distress. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 13, 42-62.

Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.

Martinez, M. A., Zeichner, A., Reidy, D. E., & Miller, J. D. (2008). Narcissism and displaced aggression: Effect of positive, negative, and delayed feedback. *Personality and Individual Differences*, 44, 140-149.

Masterson, J. F. (1993). *The emerging self: A developmental, self, and object relations approach to the treatment of the closet narcissistic disorder of the self.* New York: Bruner/Mazel.

McCann, J. T. & Biagggio, M. K. (1989). Narcissistic personality features and self-reported anger. *Psychological Reports*, 64, 55-58.

森尾博昭・山口　勧　(2007).　自尊心の効果に対する調節変数としての自己概念の力動性―ナルシシズムとの関連から―　実験社会心理学研究, 46, 120-132.

Morf, C. & Rhodewalt, F. (1993). Narcissism and self-evaluation maintenance: Explorations in object relations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 668-676.

Murray, S. L., Rose, P., Bellavia, G., Holms, J. G., & Kusche, A. (2002). When rejection stings: How self-esteem constrains relationship-enhancement processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 556-573.

中山留美子　(2008). 自己愛的自己調整プロセス：一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて　教育心理学研究, 56, 127-141.

Nakayama, R. (2008). Are narcissist psychologically healthy in ego-threatening situation? *Paper presented at the 29th International Congress on Psychology*, Berlin, Germany.

中山留美子・中谷素之　(2006).　青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討　教育心理学研究, 54, 188-198.

中山留美子・小塩真司 (2007). 自己愛傾向が怒りと抑うつに及ぼす影響(2)：パネル調査による因果関係の検討　パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集, 94-95.

中山留美子・岡田　涼 (2008). 対人相互作用場面における認知・行動は自己愛をどう反映するか　パーソナリティ心理学会第17回大会論文集, 64-65.

Neighbors, C., Larimer, M. E., Geisner, I. M., & Knee, C. R. (2004). Feeling controlled and drinking motives among college students: Contingent self-esteem as a mediator. *Self and Identity*, 3, 207-224.

Neumark-Sztainer, D., Story, M., French, S. A., & Resnick, M. D. (1997). Psychosocial correlates of health compromising behaviors among adolescents. *Health Education Research*, 12, 37-52. 新見

直子・川口朋子・江村理奈・越中康治・目久田純一・前田健一　(2007). 青年期における自己愛傾向と自尊感情　広島大学心理学研究, 7, 125-138.

Nuttin, J. M. (1987). Affective consequences of mere ownership: The name letter effect in twelve European languages. *European Journal of Social Psychology*, 17, 381-402.

岡田　涼・中山留美子　(2008). 対人的拒絶研究の概観—実験社会心理学領域を中心に—　名古屋大学教育発達科学研究科紀要, 55, 印刷中(本巻).

小塩真司　(1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究—自尊感情, 社会的望ましさとの関連—　名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 44, 155-163.

小塩真司　(1998a). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係の在り方との関連　教育心理学研究, 46, 280-290.

小塩真司　(1998b). 自己愛傾向に関する一研究—性役割との関連— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科), 45, 45–53.

小塩真司　(1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係の在り方との関連　性格心理学研究, 8, 1-11.

小塩真司　(2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性の及ぼす影響　性格心理学研究, 10, 35-44.

小塩真司　(2002a). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴—　教育心理学研究, 50, 261-270.

小塩真司 (2002b) 自己愛傾向と対人ネガティブイベントから生じる落ち込み 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 140.

小塩真司　(2004). 自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版

小塩真司　(2006). 自己愛と自尊感情が集団活動の自己評価および成員評価に及ぼす影響—2つの自己肯定感の対比—　パーソナリティ心理学会第15回大会発表論文集, 90-91.

小塩真司・中山留美子　(2007). 自己愛傾向が怒りと抑うつに及ぼす傾向(1)—調整変数としてのネガティブライフイベントの影響—　パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集, 92-93.

Papps, B. P. & O'Carroll, R. E. (1998). Extreme of self-esteem and narcissism and the experience and expression of anger and aggression. *Aggressive Behavior*, 24, 421-438.

Paradise, A. W. (1999). *Fragile self-esteem and anger arousal.* Unpublished master's thesis, University of Geogia.

Paradise, A. W., & Kernis, M. H. (1999). [Development of the contingent self-esteem scale] Unpublishd data. University of Georgia, Athens.

Park, L. E., & Crocker, J. (2005). Interpersonal consequences of seeking self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 1587-1598.

Patrick, H., Neighbors, C., & Knee, C. R. (2004). Appearance related social comparisons: The role of contingent self-esteem and self-perceptions of attractiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 501-514.

Paulhus, D. L. (1998). Interpersonal and intrapsychic adaptiveness of trait self-enhancement: A mixed blessing? *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1197-1208.

Paulhus, D. L. (2001). Normal narcissism: Two minimalist accounts. *Psychological Inquiry*, 12, 228–230.

Pulver, S. E.　(1970).　Narcissism : The term and the concept. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 18, 319-341.

Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality　inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.

Raskin, R. & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 890-902.

Rathvon, N., & Holmstrom, R. (1996). An MMPI-2 portrait of narcissim. *Journal of Personality Assessment*, 66, 1-19.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1995). Self and interpersonal correlates of the Narcissistic Personality Inventory: A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, 29, 1–23.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1998). On self-aggrandizement and anger: A temporal analysis of narcissism and affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 672–685.

Roberts, J. E., & Kassel, J. D. (1997). Labile self-esteem, life stress, and depressive symptoms: Prospective data testing a model of vulnerability. *Cognitive Therapy and Research*, 21, 569-589.

Roberts, J. E., Kassel, J. D., & Gotlib, I. H. (1995). Level and stability of self-esteem as predictors of depres-

sive symtoms. *Personality and Individual Differences*, 19, 217-224.

Robins, R. W., & Beer, J. S. (2001). Positive illusions about the self: Short-term benefits and long-term costs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 340-352.

ロニングスタム, E. F. (2003). 自己愛の障害—診断的, 臨床的, 経験的意義— 金剛出版. (Ronningstam, E. F. (1998). *Disorders of narcissism Diagnostic, clinical, and empirical implications*. Washington, DC; American Psychiatric Press.)

Rose, P. (2002). The happy and unhappy faces of narcissism, *Personality and Individual Differences*, 33, 379-381.

Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton, NJ; Princeton University Press.

Rosenberg, M., Schooler, C., & Schoenbach, C. (1989). Self-esteem and adolescent problems: Modeling reciprocal effects. *American Sociological Review*, 54, 1004-1018.

Roth, D. L., Snyder, C. R., & Pace, L. M. (1986). Dimensions of favorable self-presentation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 867-874.

Salmivalli, C. (2001). Feeling good about oneself, being bad to others? Remarks on self-esteem, hostility, and aggressive behavior. *Aggression and Violent Behavior*, 6, 375-393.

佐方哲彦 (1987). 自己愛人格と共感性の関連 和歌山県立医科大学進学過程紀要, 17, 67-75.

Schröder-Abe, M., Rudolph, A., & Schütz, A. (2007). High implicit self-esteem is not necessarily advantageous: Discrepancies between explicit and implicit self-esteem and their relationship with anger expression and psychological health. *European Journal of Personality*, 21, 319-339.

Schütz, A. & Sellin, I. (2006). *Die multidimensional Selbstwertskala (MSWS) [The multidimensional self-esteem scale]*. Göttingen: Hogrefe.

Sedikides, C., Rudich, E. A., Gregg, A. P., Kumashiro, M., & Rusbult, C. (2004). Are normal narcissists psychologically healthy?: Self-esteem matters. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 400-416.

Shackelford, T. K. (2001). Self-esteem in marriage. *Personality and Individual Differences*, 30, 371-390.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2006). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル尺度における短縮版作成の試み パーソナリティ研究, 15, 67-70.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, 16, 350-362.

Smalley, R. L. & Stake, J. E. (1996). Evaluating source of ego-threating feedback: Self-esteem and narcissism effects. *Journal of Research in Personality*, 30, 483-495.

高橋智子 (1998). 青年のナルシシズムに関する研究—ナルシシズムの2つの側面を測定する尺度の作成—日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 147.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1994). Positive illusions and well-being revisited: Separating fact from fiction. *Psychological Bulletin*, 116, 21-27.

Tefarodi, R. W., & Swann, W. B., Jr. (2001). Two-dimensional self-esteem measurement. *Personality and Individual Differences*, 31, 653-673.

外山美樹 (2006). ポジティブ・イリュージョンの功罪—小学生のストレス反応と攻撃行動の変化に着目して— 教育心理学研究, 54, 361-370.

外山美樹 (2008). 小学生のポジティブ・イリュージョンは適応的か—自己評定と他者評定からの検討— 心理学研究, 79, 269-275.

外山美樹・桜井茂男 (2000). 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, 48, 454-461.

Trzesniewski, K. H., Donnellan, M. B., Moffit, T. E., Robins, R. W., Poulton, R., & Caspi, A. (2006). Low self-esteem during adolescence predicts poor health criminal behavior, and limited economic prospects during adulthood. *Developmental Psychology*, 42, 382-390.

梅垣 武 (2006). ローゼンバーグ自尊感情尺度の次元性の検討 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 499.

内田由紀子 (2008). 日本文化における自己価値の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証— 心理学研究, 79, 250-256.

脇本竜太郎 (2008). 自尊心の肯定と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 47, 160-168.

Wallace, H. M., & Baumeister, R. F. (2002). The performance of narcissists rises and falls with perceived opportunity for glory. *Journal of Personality and*

*Social Psychology*, 82, 819–834.

Washborn, J. J, McMahon, S. D, King, C. A., Reinecke, M. A., & Silver, C. (2004). Narcissistic features in young adolescents: Relations to aggression and internalizing symptoms. *Journal of Youth and Adolescence*, 33, 247-260.

Watoson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Biderman, M. D. (1984). Narcissism and empathy: Validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, 45, 159-162.

Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.

Witte, T. H., Callahan, K. L., & Perez-Lopez, M. (2002). Narcissism and anger: An exploration of underlying correlates. *Psychological Reports*, 90, 871-875.

山本真理子（編）(2001). 心理測定尺度集Ⅰ－人間の内面を探る<自己・個人内過程>　サイエンス社

山本真理子・松井　豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面 教育心理学研究，30, 64-68.

安田朝子・佐藤　徳　(2000).　非現実的な楽観傾向は本当に適応的といえるか：「抑圧型」における楽観傾向の問題点について　教育心理学研究, 48, 203-214.

Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability. *Journal of Personality*, 74, 119-143.

Zeigler-Hill, V., Clark, C. B., & Pickard, J. D. (2008). Narcissistic subtypes and contingent self-esteem: Do all narcissists base their self-esteem on the same domains? *Journal of Personality*, 76, 753-774.

(2008年11月5日受稿)

## ABSTRACT

# Faces of Positive Self-Regard: Perspective from Studies on Self-Esteem and Narcissism.

Rumiko NAKAYAMA

Concepts of self-esteem and narcissism have been treated contrastingly though they had similarity. The purpose of this article was to look at enormous findings on self-esteem and narcissism through the viewpoint of positive self-regard. First, empirical knowledge on self-esteem and narcissism were organized and compared in domains of interpersonal relationships, (anti)social behavior, and mental health. Second, contents of the most major scales on self-esteem and narcissism were examined to figure out commonality and difference between these construct. Third, several theoretical frameworks capturing self-esteem and narcissism as dual concepts, two faces of narcissism (narcissistic hypersensitivity), stability of self-esteem, implicit self-esteem, contingent self-esteem, were introduced. Then, findings on these frameworks were overviewed, and integrative model was proposed. Lastly, future directions were suggested.

Key words: (unrealistically) positive self-regard, (fragile) self-esteem, two faces of narcissism